

増えた輸入野菜と市場相場

昨年は、生鮮野菜の輸入が多かった前年よりさらに11%増えて約88万tになった。震災発生に絡んでの消費低迷と比較的順調な気候の推移もあり、猛暑の影響が大きかった一昨年より相場は全体に低迷きみであったにもかかわらず、輸入が増えたのはなぜか。数量で輸入生鮮野菜の43%を占めるタマネギは

国産が引き続き不作だったため、さらに1割増えたが、ほとんどの品目が前年並みから増勢だった要因はなんだろう。安値志向の加工・業務用中心に輸入の原材料は流通しているといわれるものの、特に輸入が増えた品目を卸売市場での入荷推移、価格動向と対比しながらその原因を探ってみよう。

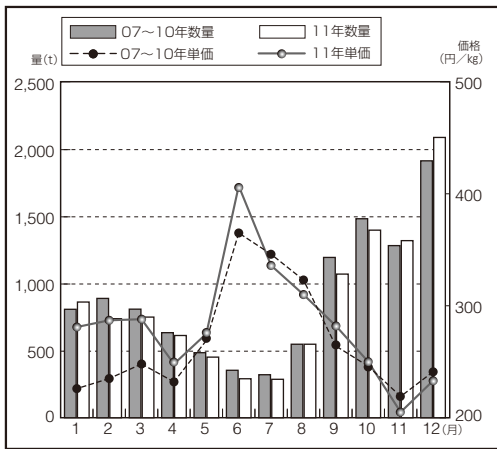
野菜生産者のための相場研究

サトイモ

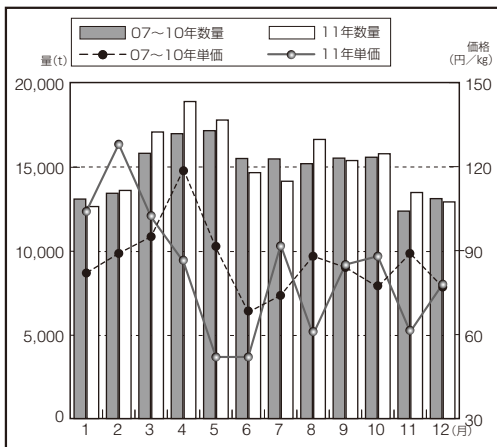
【概況】
 昨年の東京市場のサトイモは、前年の不作を受けて年明けにやや入荷が増えたものの、以降7月まで平年を下回って高値が続き、翌8月からは新物の出始めでやや回復した。ただ、それも一時的なもので、結局は11月以降、入荷が増加して単価が沈静化するまで年間を通じて入荷減の単価高だった。入荷量は主産地の千葉が16%増と頑張ったが、他の産地は少ない。これを補完すべく中国産の輸入が4割も増えた。

【今後の対応】
 昨年は7月が最も入荷が少なく、高騰した。普段でも春先から夏にかけては入荷が減って高くなるが、昨年は異常だった。中国産は、前年の国産の不作を踏まえ、年明けから前年より倍増に近いペースで入荷していたものの、なぜか7月には6月の半分以下になった。そこで途端に暴騰したのである。夏場を中心に需要は業務用が中心になるためだが、この時期の主産地である宮崎や鹿児島など九州産地の増産をひたすら期待するしかないようだ。

【背景】
 昨年は輸入量が前年から54%増え、約1万2000tだった。そのうち、東京市場に入荷したのが4割増の1044tである。同市場は全国の国産野菜卸売量の約1割のシェアがあるとされるため、ほぼ順当な入荷状況にみえるが、輸入量の増加に比べればその割合は低い。そのギャップは加工・業務用の市場外流通にある。実は4年前の中国産野菜の敬遠傾向の際には、そのギャップはもっと大きく、輸入量の割に市場入荷量は少なかったのだ。



【背景】
 昨年の輸入は前年から16%増えて2万7000t、86%が中国からだ。これに対して東京市場には輸入品がトータルで147t程度、うち中国産が約8割を占める。全体の輸入量からしたら2500tほどは同市場への入荷が普通のため、少なくとも市場入荷動向で見ると、3万t近い輸入があったとは思えない。国産の大口の加工業務用需要が2年連続で不安定なことから、市場での調達は期待できないと判断し、輸入品を直接調達した結果だろう。



キャベツ類

【概況】
 東京市場の昨年のキャベツ類の入荷は年間トータルで数量も単価も平年並みだった。年明けは入荷量が少なく、高かったものの、春には増えて単価安、夏は高安まちまちで推移した。要は不安定な入荷状況が続いた年だったといえる。一昨年は猛暑などの影響で年間を通じて高かったため、ある意味では2年連続で作柄が安定しなかったと総括できる。同市場で年間17~18万tもの入荷がある主要品目だけに影響は少ない。

【今後の対応】
 130万tはあるといわれる国産キャベツからすると3万t程度の輸入は微々たるものである。しかし、最も基幹的な食材であるキャベツは全国の産地でリレー栽培をしており、どこの地域にも地場生産があるはずだ。それでも輸入依存がなくならないのは国内の加工・業務用生産の普及が未発達だからである。大口需要者を中心に全国で契約産地を囲ってリレー栽培をするケースも増えているが、全体としてまだ産地側の受け皿作りは進んでいない。

今年の市場相場を読む

中国産が復活傾向で8万tの輸入。加工向けの新たな「規格」の検討を

【概況】

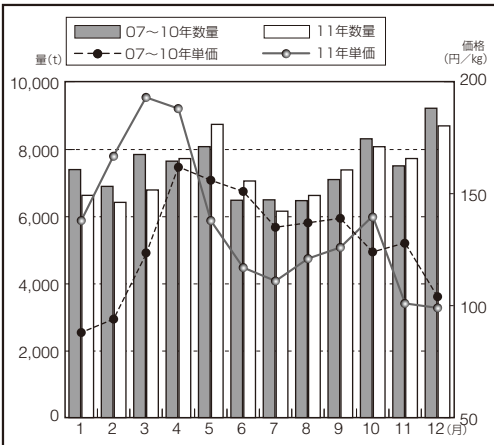
東京市場の昨年のニンジンでは前年の夏以降、入荷が不安定で高値続きだった流れを受けてか春先まで高かった。夏場以降は沈静化し、需要期の秋から冬には前年の高値に比べ安値で推移した。これに対して輸入品は中国産を中心に相場に關係なく、毎月200t前後のコンスタントな入荷があり、年間では約2300t程度だった。シエアは3%程度に過ぎないが、春を中心にニューージーランド産がまとまって入荷している。

【背景】

昨年の輸入量は約8万tで前年から23%も増えた。8万tという数字は東京市場の年間入荷量に迫るものである。2006年に10万tもの輸入量があった後、中国産への敬遠機運で大幅に減っていたが、ここ2～3年は盛り返ってきている。ただ、需要構造は変わっているため、市場入荷量でみるとまだ多かった年の半分程度である。一昨年、昨年の同市場への入荷はほぼ変わらない。輸入が増えた分は加工・業務用で流通しているのだ。

【今後の対応】

輸入全体でみると、中国産のシエアは83%だが、東京市場では中国産が9割を超える。しかも、年間を通じてコンスタントな入荷だ。これはほとんどが一般小売商材ではなく、市場入荷品から調達している中小の業務需要筋が安い中国産を求めているものだろう。入荷方法も卸売会社の買い付けではなく、輸入商社による委託出荷の部分も少なくない。国内産地でも太物やC品で「加工業務用」という新たな市場出荷用「規格品」を作ってもよい。



ゴボウ

【概況】

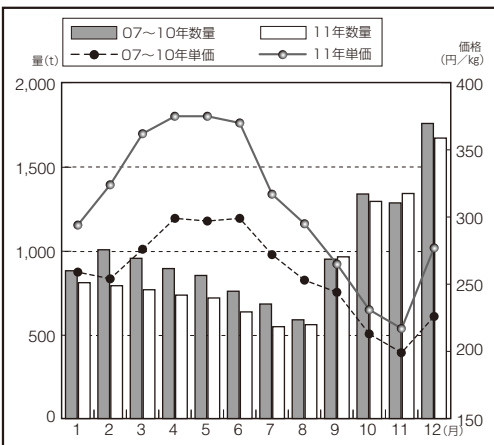
東京市場の昨年のゴボウの入荷状況をみると、近年では最も少なく、高値が続いた。2004年と11年の対比でも2割減の25%高である。一年を通じてどの月も過去4年平均を入荷量で下回り、単価で上回った。こんな年には輸入品の入荷も増えて当然だが、中国産はわずかに345tでシエアは4%。不需要期の夏場も需要期の秋から毎月30t程度でほぼ同量の入荷が続いた。業務用対応のパターンである。

【背景】

昨年の輸入は前年から24%増えて4万5600tだが、東京市場にはその1%にも満たない量しか入荷していない。国産がいくら高くなっても小売商材として中国産は売れない。一般的な業務用でもゴボウはマイナーな食材である。輸入のほとんどが水物や惣菜向けの加工用としての流通だったことがわかる。ただ、年間を通じて入荷減の高値推移だったにもかかわらず、「中国産の市場入荷が少なすぎるのでは」という疑念は捨て切れない。

【今後の対応】

ゴボウはかつて水洗いするだけで加工品扱いになっていたため、生鮮品としての入荷に求められる「原産地表示」の対象外になっていた時期もある。そのため、産地業者は中国産の作柄や相場に非常に敏感であり、投機的な要素や偽装の入り込む余地の多い世界だった。偽装の可能性を排除するためにも春ゴボウや新ゴボウなど旬を訴求できる国産の生産を拡大していくべきだ。産地と加工業界の連携や契約拡大が求められる。



流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オビニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」、「レポート青果物の市場外流通」、「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。